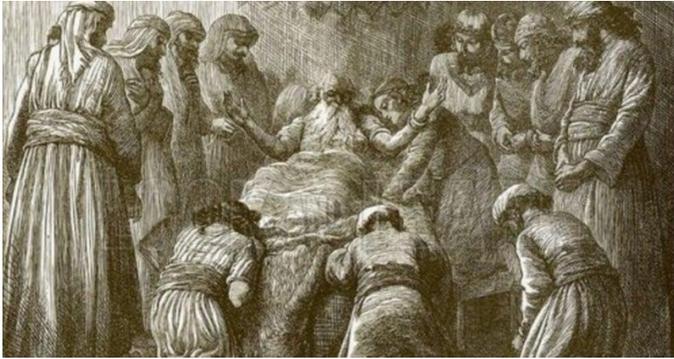


2021年4月25日 説教「神の良き計らいが」

創世記 50 章 15～21 節



ヤコブの死を受けて、ヨセフは遺言通りカナンの地で葬儀を行い、マクペラの墓に埋葬をし、一家はエジプトに戻りました。

1. 兄弟達の恐れと対応 (15～17a 節)

①兄弟たちの恐れ (15) 「**ヨセフの兄弟たちが、彼らの父が死んだのを見たとき、彼らは、ヨセフはわれわれを恨んで、われわれが彼に犯したすべての悪の仕返しをするかもしれない**」と言った。」父の死後、弔いもようやくにして済み、いささか落ち着いた頃です。ヨセフの兄弟たちには、不安が生じ始めたのです。ヤコブ地上にいなくなった今、かつて自分たちがなした取り返しのつかない悪行を思い出させられたのです。つまり、まだ皆が若い頃、兄弟たちには生意気だと思われた、弟のヨセフをエジプトに行く隊商に売り払ってしまったということです。いくら父親から偏愛されていたとはいえ、なしてはならない罪でありました。思いもかけず、ヨセフはエジプトの宰相になり、飢饉の際に父共々、自分達も引き取られて命を守られてきました。とはいえ、ヨセフのうちには、かつての自分たちの罪に対する恨みがあって、仕返しされるのではと恐れたのです。

②父は死ぬ前に (16) 「**そこで彼らはことづけをしてヨセフに言った。『あなたの父は死ぬ前に命じて言われました。』**」兄弟たちは、いろいろと相談をした結果、一つの対応を取ることにしました。それは、やはり父ヤコブの威光に頼ることでした。そこで、「死ぬ前にあなたの父ヤコブはこのように命じていました。」とことづけをしたのです。直接にはなく、遣いの者に命じたのも彼らの知恵でした。

③赦してやりなさい (17a) 「**ヨセフにこう言いなさい。あなたの兄弟たちは実に、あなたに悪いことをしたが、どうか、あなたの兄弟たちのそむきと彼らの罪を赦してやりなさい、と。**」遣いの者へのことづけの要は、父ヤコブの意思を上手に伝えることでした。つまり、第一に兄弟たちはヨセフに対して悪いことをしたということ。第二に、とはいえ彼らのそむきの罪を赦してやりなさいと、父ヤコブは述べていたと、兄弟達は遣いの者に懇ろに伝えさせたのです。

2. 赦しの願いとヨセフの応え (17b～19 節)

①赦してください。 (17 b) 「**『今、どうか、あなたの父の神のしもべたちのそむきの罪を赦してください。』**」ヨセフは彼らのこのことばを聞いて泣いた。」そして、遣いの者を介して、謝罪しました。謝罪に際しては、まず自分たちが神のしもべであることを伝えます。その上で、彼らのそむきの罪を、「赦してください」と伝えたのです。「今、どうか、赦してください」という言葉は、伝言だとはいえ、真実の響きがありました。ヨセフはこのことばを聞いて、泣いたのです。それは、彼自身が来し方を振り返る時でもあったからでしょう。



②ひれ伏して (18) **「彼の兄弟たちも来て、彼の前に彼の前にひれ伏して言った。『私たちはあなたの奴隷です。』**」様子を見計らっていたのか、兄弟たちもヨセフの前にやってきました。そして、ヨセフの前にひれ伏したのです。かつて、ヨセフが見た夢を思い出します。兄弟たちの束が、ヨセフの束におじぎをするという夢。太陽と月と 11 の星がヨセフを伏し拝んでいる夢 (37 章) です。その夢の通りになっているのです。そして、兄弟達は謝罪の心を込めて、「私たちはあなたの奴隷です。」と述べました。彼らは必死に、覚悟を決めて伝えたのです。

③神の代わりではない (19) **「ヨセフは彼らに言った。『恐れることはありません。どうして、私が神の代わりでしょうか。』**」それに対して、ヨセフは返します。「恐れることはありません。」。兄弟たちに、おびえの様子がうかがえたからです。ヨセフの自己認識は神信仰に基づいていました。人間的になれば、自分の権力を振りかざし、傲慢に振舞う可能性もあったでしょう。しかし、ヨセフは、「私は神の代わりではありません。」と述べました。なんと謙遜なことでしょう。アブラハム、イサク、ヤコブからの信仰を、エジプトの地にいたヨセフが確かに引き継いでいたのです。

### 3. 神のご計画 (20~21 節)

①良いことのため (20) **「あなたがたは、私に悪を計りましたが、神はそれを、良いことのための計らいとなさいました。それはきょうのようにして、多くの人々を生かしておくためでした。」**ヨセフは、自らの見解を述べました。それは第一に兄弟たちは、たしかに悪を計ったということ。第二に神はそれをも用いて、良いことに変えてくださったということ。第三に神はその具体的な証として、ヤコブの召天をともしに見守り、ともに弔うまでに生かしてくださった、とヨセフはすべてが神の御手のなかにあることを述べたのです。ヨセフ自身はわだかまりなく、神の御業であると伝えたのです。

②養いの保証 (21a) **「ですから、もう恐れることはありません。私は、あなたがたや、あなたがたの子どもたちを養いましょう。」**そして、兄弟たちに伝えたことは、「もう恐れることはありません。」でした。なんと優しく、配慮に富んだ言葉でありましょうか。そして、「あなたがたの子どもを養いましょう。」とはなんと寛容な言葉でしょう。新約聖書的にいえば、御霊に導かれた者に結ばれていく、御霊の実をヨセフの内に宿されていたといましよう。神は、エジプトの地にあってもヨセフを霊的に養ってくださっていたのです。

③優しく語り (21b) **「こうして彼は彼らを慰め、優しく語りかけた。」**ヨセフは、ヤコブが死んで、仕返しされるかもしれなと恐れをなしていた兄弟たちを慰め、彼らに優しく語りかけたのです。

### 《結論》

骨肉の争いと言いますが、創世記はカインとアベルの出来事に始まり、ヤコブとエサウの確執がありました。続く、ヤコブの子達の中では兄弟達がヨセフを嫌い、エジプトに行く隊商に売り払ったことは、その後の一家の歩みにとって、大きなうねりの端緒となりました。

かつて、ヤコブが兄のエサウを欺いて長子の権利と祝福をもぎとったことから、北の地に逃れたことがありました。20 数年にわたる年月、ヤコブにはいつもエサウのことで、通奏低音のごとく響く心の痛みがありました。そして、ヨセフの兄弟達も弟のヨセフに対する仕打ちにより、長い間、苦しむことになりました。また、飢饉の中でエジプトの地にわたり、エジプトの宰相となったヨセフと再会し、一家はその庇護を受けるといふ予想もしない状況になりました。再会した時も、驚きのあまり絶句し、恐れもしました。しかし、ヨセフを通して、「私をここ (エジプト) に遣わしたのは、あなたがたではなく、実に神なのです。」 (45:8) と伝えられ、抱き合って喜びました。やがて、父ヤコブを伴って、エジプトのゴシェンの地に住む場所を提供されて、平穩に過ごしてきたのです。ところが今、その結びの要となっていた父ヤコブが亡くなり、葬りもなされて落ち着くと、改めて兄弟達のうちには、ヨセフが昔のことで仕返しをしてくるのではと、恐れをなし、心配するようになったのです。

そこで、兄弟達は段取りを整えて、改めてヨセフに謝罪をしたのです。それに対してのヨセフの弁は、神信仰にしっかりと根ざしたもので、いささかもぶれることがないものでした。兄弟たちと再会した時に述べた時と、内容が一貫としていました。「あなたがたは、私に悪を計りましたが、神はそれを、良いことのための計らいとなさいました。それはきょうのようにして、多くの人々を生かしておくためでした」。いささかも揺らがない神中心の思考でした。初代教会の時代、クリスチャンを迫害し、ダマスコ途上でキリストと出会い宣教者となった使徒パウロは、「神は愛する人々、すなわち、神のご計画に従って召された人々のためには、神がすべてのことを働かせて益としてくださることを、私たちは知っています。」 (ローマ 8:28) と記しています。それはパウロの信仰生活からの確信でもあったのです。

私たちの歩みにおいても、骨肉はもちろん、人々との間に争い、憎しみ、妬み、欺きなどがあって、苦しんだり、心傷んだりすることがあるでしょう。ヤコブのように 20 年以上もの歳月にもわたって、わだかまりが続くこともあるのです。ヤコブの場合は主の憐みで、エサウとの和解、赦し合いが与えられました。そして、ヨセフと兄弟達の場合は、兄弟達の謝罪とヨセフの赦しにより、平和が与えられました。ここで注目したいことは、父ヤコブや兄弟達から離されていたヨセフのうちに、恵みの神への信仰が維持されていたことです。たとい、

父ヤコブから「赦しなさい」という促しがあっても、神信仰がなければ赦せなかったでしょう。主の恵みのご計画を実感していたからこそ、赦すことができたのです。彼はかの地で主を仰ぎ続けていたのです。

私どもも、キリストの神を信じる信仰という面では少数派の国に生きていま

す。だからこそ、日々に主を仰ぎ続けたいのです。予想もしていない、難しい事態に遭遇する時にも、道が開かれるという信仰に立ちたいのです。復活の主は、そのような事態にあっても、新たに生きる恵みをもたらしてくださいます。今週も復活の主を仰いでいこうではありませんか。